17年間の超音波検査を振り返って

山本敏樹
日本大学医学部内科学系 消化器肝臓内科学分野

［略歴］
平成5年3月　日本大学医学部医学科卒業
平成11年3月　日本大学大学院医学研究科博士課程内科系内科学III卒業
平成5年5月　駿河台日本大学病院内科系総合臨床研修医
平成20年2月　日本大学医学部消化器肝臓内科分野 助教
平成22年4月　駿河台日本大学病院 内科外来医長

昨今の若手医師の医局離れの影響なのか、大学に勤務する医師も減少し雑用的な仕事が随分と増え、最低限の“ノルマ”と思われる“duty”をどうにかこうにか片付けるので精一杯という平凡な日々を送っていました。その様ななか、今回随筆集を発刊されるということで“duty”という呪縛から自分を解放し、一息ついて気分転換する絶好のチャンスを得ることができました。最初は『私と超音波』といわれても、超音波の思い出といえるほどの経験はまだ自分にはないんだけどなあ、などと思いましたが、ふと振り返ってみると自分の普段の自覚が足りない所為もありますが、何と、あっという間に医学部を卒業し17年が経ち18年目を迎えるに至っておりました。寂しいやら、恐ろしいやら恥ずかしいやら、かといって反省して頑張るというほどの充実した気力は今さらなく?だからといって放っておくとどんどん現状は悪化し、間違いなくやぶ医者になってしまうであろう自分の将来に不安を覚え、ここは早めに手を打つべしということで反省も込めて、先輩方の回想録には及ぶわけはありませんが、あっという間に過ぎ去った17年間を振り返り、今後のテーマを考えることにしました。

学生の時には試験問題でみるような疾患のエコー画像を少しは記憶しましたが、エコーの長所であるリアルタイムでの観察が可能であるということの意味に気づくこともなく、ドプラの赤だ青だというのも面倒くさいと思っていました。今では“身近”な存在ですが、そのころの自分には“身近”というよりもむしろ遠く遠くのほとんど無関係な存在でした。しかし今回超音波と自分の関係を振り返ってみると、まず医学部卒業後、研修を開始したばかりのときに本当の意味での最初の出会いがありました。医局の先輩方についてエコーの検査を週1回行うようになり、見様見真似で患者さんに検査を始めるものの腹部のルチンの検査にもたつき、半分も終わらないうちに先輩にプローブを取り上げられ、先輩が描出する画像が同じ患者さんの検査と思えないぐらい見え方が違うのに驚き、いつか自分もきれいな画像が撮れる日が来ると信じ検査をするのが楽しみになっていました。そのうちに同級生がどんどん上手に検査が出来るようになる一方僕は上達が遅く、劣等感を感じるようになりましたが、それがむしろ超音波の奥深さを認識するきっかけとなり、また患者さんにとって苦しい検査ではなく、何よりも自分で病変を直接観察して確認できるという魅力から超音波を身につけてこの先一生の武器にできればと思い、消化器肝臓内科に入局する決断をしました。つまり、超音波があったから今日の消化器内科医としての自分が存在したわけで、超音波が沢山の先生方のルーツであると同様に僕のルーツだったのです。その後エコーを始めてからの自慢や失敗は沢山あって切りがありませんが、昔の反省として思い出すのは、常日頃からのデータ整理を怠り娯楽を優先する結果、研究会や学会の前になると狭い超音波室に不釣合いな人数の医者が集まり、切羽詰ってきた面々が個々のスライドの準備をほぼ同時に開始するのが恒例となっていました。前日の深酒、睡眠不足に加え、密室で換気が悪いため集まってもみんなすぐに眠くなり、それでも頑張って無理をしてしまうとめまいや頭痛、さらには複視、幻覚に苦しむようになり、早く自宅に戻って『ベッドで休養が必要な状態』、すなわちドクターストップの状態になるのですが、そこは他大学同様に日本大学も厳しい伝統があるのです。2時だろうが3時だろうがその日の限界に達したらエコー室を解散となり、その後たとえ立っているのもつらい状況であっても一人の脱落者も出さず（何回か弱音を吐いてみたがほとんど無駄）病院玄関前に集合し、しっかりビールを飲み過剰な栄養を取ってからよ

うやく帰宅が許されました。学会が終わるまで毎日繰り返されるのですが、健康的な生活が一番と今更ながら反省しています。

最近の反省としてはついついよい機械の前に座ってしまい、画質の悪い機械で検査をしなければならないときはモチベーションが低下していることです。装置の向上の上に胡坐を掻いて機械に頼って検査をするようになってしまいました。また、造影検査が出来るようになってからエコーは一段と進歩し、難しくなってきたと実感しています。機械やソフトも日進月歩の進化がみられ、得られる情報も多くてついていくのが大変です。17年目でもしかしたら早くも挫折しているのかもしれませんが、B-modeとドプラをもっと上手く使いこなし、今まで目を向けなかった領域も頑張ってみてみようと思っています。ハイエンドの機種ではなくたとえ汎用機であってももっとみえるように努力し、諦めないで自分の技術を磨くとともに、これからスタート地点に立つ後輩にも超音波を“身近”な存在として感じることが出来るように、スタッフの健康の健康にも気を配りながら指導できればと思います。